

仙台第7分所（花岡）

笹本妙子

この収容所は秋田県の花岡鉾山にあった。花岡鉾山と言えば、1945年7月1日、過酷な労働に耐えきれずに蜂起した中国人が400人以上虐殺された「花岡事件」で知られる。この事件が発覚したのは、終戦後、進駐軍が連合軍捕虜収容所の調査のために花岡を訪れ、中国人のいた「中山寮（ちゅうさんりょう）」の小屋で棺桶から手足のはみ出ている死体を見つけたのがきっかけだったという。連合軍捕虜がここで働いたのは7ヶ月ほどであるが、彼らの生活もまた厳しいものであった。

■歴史

1944.12.1 東京第9分所として、秋田県北秋田郡花岡町（現・大館市花岡）字観音堂に開設。

1945.1.29 米捕虜 146 人が到着（フィリピンから台湾を経て）

1945.3.30 米捕虜 100 人が到着（ウェーク島から上海、川崎を経て）

1945.4.14 仙台第7分所と改称

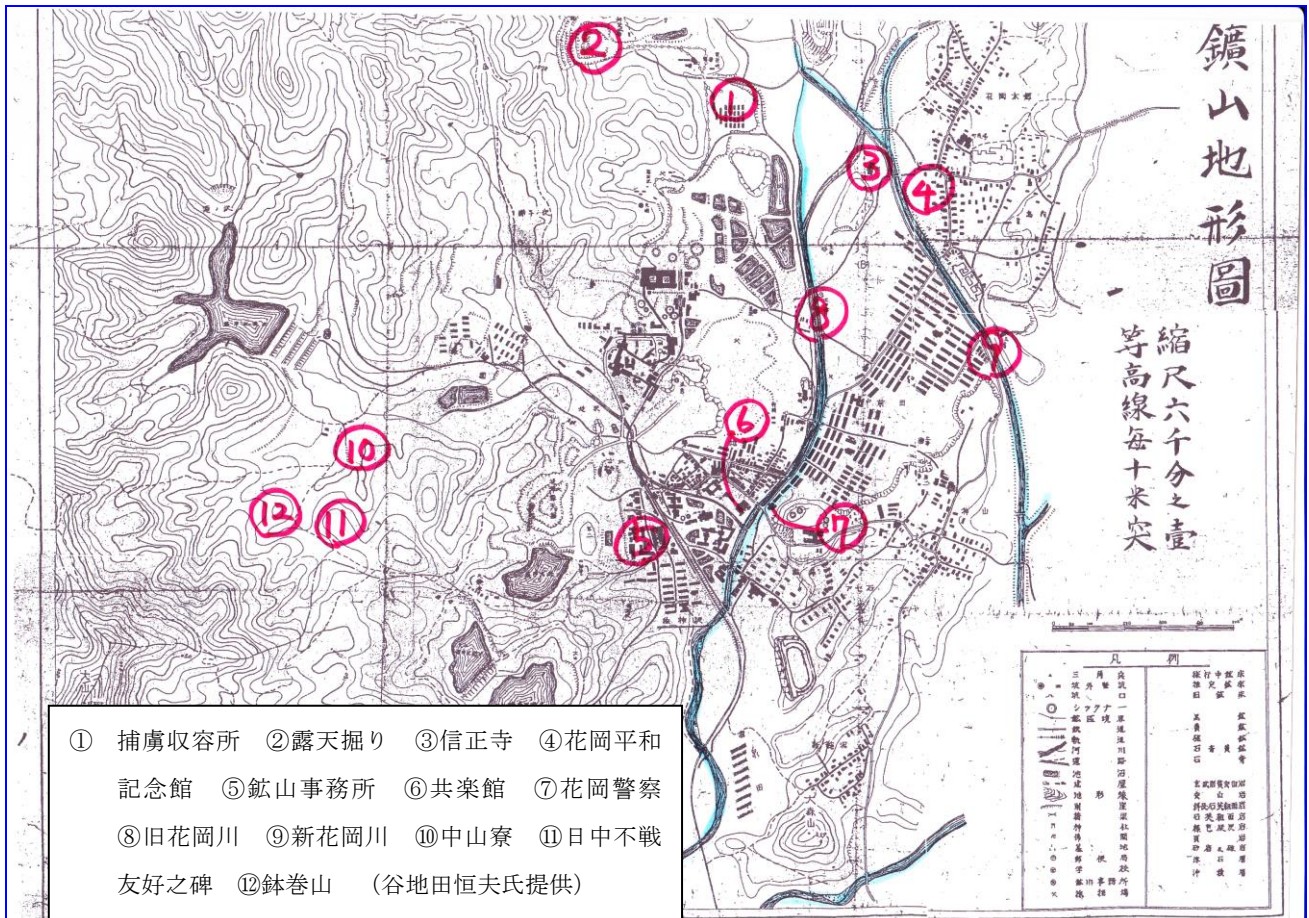
1945.6.27 豪捕虜 44 人が到着（直江津、善通寺を経て）

1945.8.15 終戦

1945.9.11 頃 帰国

終戦時収容人員 288 人（米 245、豪 43）、収容中の死者 6 人。

■所在地・居住環境



この収容所は、秋田県北秋田郡花岡町（現・大館市花岡）字観音堂にあった。前頁の地図は当時の花岡鉦山地形図（花岡平和記念会館副理事長・谷地田恒夫氏提供）で、収容所は①に位置していた。②は捕虜たちが働いた露天掘りの現場である。蜂起した中国人の宿舎「中山（チュウサン）寮」は⑩である。この他にもう1つ、「東亜寮」という中国人の宿舎が捕虜収容所の北にあった（この地図の枠外）。ちなみに、連合軍捕虜と東亜寮の中国人は花岡鉦山（藤田組花岡鉦業所）に直接雇われていたが、中山寮の中国人は花岡鉦山の下請けで、花岡川改修工事を請け負った鹿島組に雇われていた。

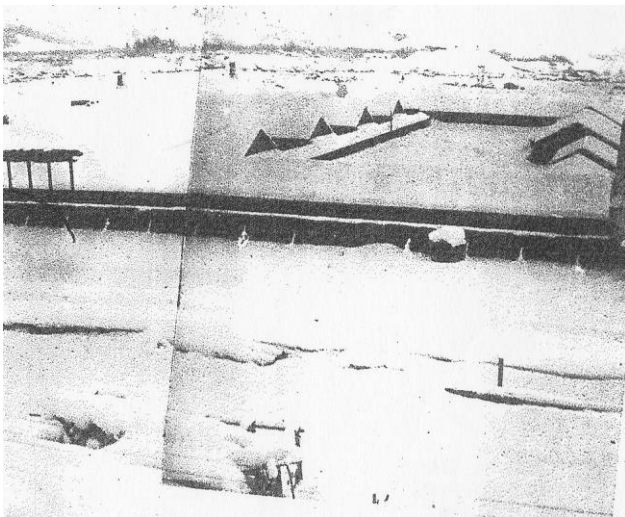
左下の写真は、GHQの調査官が1946年1月中旬に現地調査に行った際、毎日新聞大館通信局のカメラマン村山ヨシデ（ヨシヒデ？）が撮影した収容所の写真である。マイクロフィッシュからのコピーなので画質が悪いが、雪に埋もれた収容所の様子が何となくわかる。右下は、筆者が2010年6月に花岡平和記念館副理事長の谷地田恒夫氏の案内で訪ねた収容所の跡地である。白い斜面の辺りに収容所があったという。

捕虜たちは、収容所東側の大きな建物3棟に居住した。アメリカ人は北端の建物の東端の部屋、オーストラリア人将校は収容所の北端から3番目の建物に住んだ。各建物は10部屋に区分けされ、各部屋には上下の寝棚があり、下段は土間から約60センチ高くなっており、上段に登る梯子がついていた。寝棚には畳が敷かれ、捕虜たちは畳の上に布団2枚と毛布1枚を敷き、毛布1枚と2枚以上の布団をかけて寝ていた。

各棟に土間通路が貫き、その真ん中に4つの小さな薪ストーブが置かれていた。ストーブの煙突は建物の片側の窓から突き抜けていた。建物にはすき間風が入ったので、窓の周りや壁のひび割れに紙を詰めていた。

収容所の北側の建物の中に炊事場、浴室、倉庫があった。浴室には50人収容の大きな浴槽があり、捕虜たちは週に1回の入浴ができた。50人が入浴すると、浴槽は空になったという。

日本人職員の宿舎と独房は収容所の北西部の建物の中にあった。診察室と病院は、南西部の建物の中にあった。管理棟は収容所の西側、西門のすぐ南にあった。



花岡収容所 1946年1月撮影 GHQ304号より



収容所跡地 2010年6月撮影

■収容所職員

GHQ/SCAP 法務局調査課 304号報告書（以下、GHQ304号）によると、初代の所長は佐藤正（マサ）

大尉、2代目は山本安政少尉、3代目は三沢少尉だった。佐藤大尉は収容所の管理を直々に行い、労働時間の順守に厳しかったという。山本少尉は佐藤大尉ほど捕虜の福利厚生に頓着しなかったので、捕虜たちの評判が悪く、彼の在任中に4人の捕虜が逃亡を図った。三沢少尉は捕虜たちにとっても好かれ、親切で多少の英語ができ、Beidenstein 大尉としょっちゅうおしゃべりしていたが、まもなく捕虜関係の用で朝鮮に発った。三沢少尉の不在中は佐藤大尉が管理し、1945年6月27日にオーストラリア人将校たちが到着したときも彼が管理していた。

白川松三郎軍曹は、収容所運営の責任者だった。正木及勝（オカツ）軍曹は収容所の通訳を務めた。佐藤テイキチ伍長は物品の責任者。アラタ・トシジ少尉は収容所の軍医だったが、秋田の陸軍病院に所属していたため、収容所にはほんの時たまに来る程度だった。通常は衛生軍曹の中山キイチと高橋ケイイチ一等兵が医務を担当していた。この他、数人の民間人が収容所に雇われていた。また、秋田第57連隊から12人で構成される一個分隊が、収容所の警備に当たり、物品室、収容所の門、捕虜の労働現場などに配置された。衛兵の構成メンバーは始終入れ替わった。

■捕虜

この収容所には3グループ、計290人の捕虜が収容された。前任将校は、アメリカ人の Beidenstein 大尉であった。

1945年1月29日に到着した最初のグループ146人は、フィリピンで捕虜になったアメリカ人である。彼らは1944年10月3日に「北鮮丸」でマニラを出発、同年11月11日に台湾の高雄に到着し、約2ヶ月間を台湾内の収容所（屏東の第3分所、白河の第4分所、斗六臨時分所、員林臨時分所のいずれか）で過ごした後、1945年1月4日に「めるぼるん丸」で高雄を出発、同年1月23日に門司に到着し、1月29日に花岡に着いた。Beidenstein 大尉はこのグループの隊長であった。

1945年3月30日に到着した次のグループ100人もアメリカ人である。ウェブサイト「POWs in Japan, World War 2」によると、彼らはウェーク島の米軍基地建設工事に従事していた民間人労働者だったが、1941年12月23日に捕虜となり、上海に送られた後、日本に移送された。他資料で補ってみると、以下のようなルートをとったと推測される——1942年1月12日、アメリカ人捕虜1187人が「新田丸」でウェーク島を出発、横浜を経て1月23日に上海に着き、呉松の収容所で1年7ヶ月を過ごした。1943年8月29日「室戸」で上海から大阪に送られ、うち100人が川崎の東京第5派遣所に収容され、2年半を過ごした後、花岡に移送された——と。

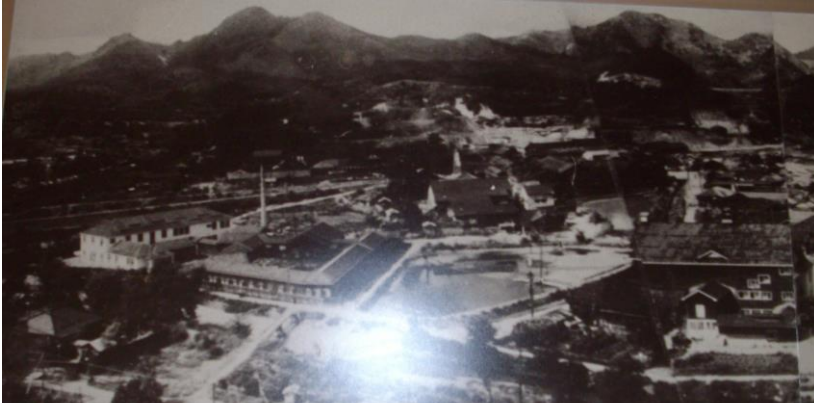
1945年6月27日に到着した最後のグループはオーストラリア人将校44人で、彼らは普通寺収容所から移送されてきた。そのうち写真の9人（終戦直後に撮影）は普通寺の前には新潟県の直江津収容所にいたことがわかっていて、直江津にいたオーストラリア人は約300人であるが、彼らはシンガポールで捕虜となり、1942年11月28日に「鎌倉丸」



終戦直後のオーストラリア人将校たち 後ろの宿舎の屋根に「PW」のマークが見える オーストラリア国立戦争記念館蔵

で同港を出発、12月7日に長崎に着き、直江津に送られた。そのうちの9人が後に善通寺に送られ、さらに花岡に送られたと考えられる。9人以外の人々については不明である。

■労働



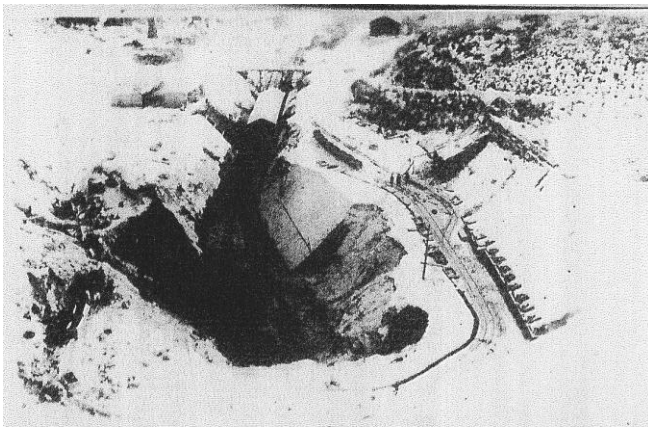
最盛期の花岡鉱山 「花岡平和記念館」展示写真より

捕虜たちは藤田組が経営する花岡鉱山で使役された。この鉱山は明治初期に発見され、黒鉱と呼ばれる良質な鉱石から亜鉛や鉛などのほか金、銀などの貴金属も採取していた。日本では珍しく、大規模な露天掘りが行われていた。昭和18年に軍需工場に指定されると増産体制が敷かれ、学徒、朝鮮人、中国人、連合軍捕虜も動員されることになった。

最初の捕虜グループは、到着約1ヶ月後の1945年2月25日から花岡鉱山で働きはじめた。1日1シフトであった。23人は機械工場、6人は電気工場で働いた。これらの工場は収容所から徒歩20分の鉱山事務所のそばにあり、彼らの日課は以下の通りであった。5:00 点呼、6:00 朝食、6:40 出勤、7:00 仕事開始、9:00 休憩15分、11:00~12:00 昼食、12:00 仕事再開、14:00 休憩15分、15:30 仕事終了片づけ、15:40 帰舎。最初、彼らは日本人と一緒に働いていたが、その職場の班長があまりに下劣だったので、1945年5月、捕虜たちは日本人から離され、より上の班長のいる職場で働くようになったという。

残りの捕虜たちは収容所から徒歩2~3分の露天掘りの現場で働いた。日本人は穴の下部で作業し、捕虜たちは穴の上部で土の運搬作業に従事した。雨の日には、雨よけのシェルターのある室内で働いた。コイルやケーブルを巻くような軽作業は病人に割り当てられた。作業現場が収容所のすぐ近くだったので、昼食は収容所に帰って食べ、16:00に帰舎した。左下の写真は当時の露天掘り現場、右下は2010年に撮影したその跡地である。穴は埋め立てられ、湿地のようにになっている。

働く捕虜には会社から1人1日1円の賃金が支払われた。行いの良い捕虜には10~20銭が追加された。将校は、収容所内や敷地に隣接する畑で働いた。



露天掘り現場 1946年1月撮影 GHQ304号より



露天掘り跡地 2010年6月撮影

■食事

GHQ304号によれば、陸軍の規定では捕虜1人当たり1日30銭の食費で3000カロリーの食事を賄うことになっていたが、花岡鉦業はこの食費で3000カロリーは賄えないと判断し、1人1日70銭分の食料を購入し、収容所に届けていたという。1人1日に705gの米または大豆と、1週間に1度肉が支給された。

炊事場は、佐藤テイキチ伍長の下で働く8人の捕虜スタッフによって運営されていた。食料を調達するのは至難の業で、白川軍曹が個人的に花岡に野菜を買いに行ったとか、佐藤伍長が北海道でボートを借りて魚を釣り、収容所に送ったなどのエピソードも記されている。

■衣料

衣料品の支給は日本陸軍の責任だったが、鉦山当局は捕虜1人1人にズボン下、シャツ、地下足袋、木の皮でできた雨用帽子、箸を各1組、木綿靴下2足、わら靴1足、わら手袋1組、石鹸、布団4枚を支給したという。陸軍はオーバーコートを支給した。捕虜たちは靴修理の用具を持っていて、自分たちで靴修理をしていた。

■休養・娯楽

収容所の正門のすぐ右に酒保（売店）があり、歯磨き粉など多少の日用品を買うことができた。

陸軍からバレーボールの道具やバスケットボールが支給され、捕虜たちは仕事終了後や自由時間にバレーボールやキャッチボールをすることができた。P3の捕虜の写真のバックに写っているバレーボールネットはその1つと思われる。シェークスピア全集などの本やトランプも支給されていたらしい。

1945年6月までは第1、第3日曜日だけが休日だったが、それ以後は食糧が不足したため、鉦山当局は十分な食糧を与えずに捕虜を働かせるのは賢明でないと考え、基本的に日曜日を休日とした。陸軍の命令で何人かが日曜日に働かされたこともあったが、それでも毎月4日の休日を与えられたという。

捕虜たちは収容中に赤十字小包をもらっていたと思われる。彼らがガムを噛んでいる姿が目撃されており、ガムは赤十字小包の中にあっただからだ。

■懲罰・虐待

収容所の北西部の建物の中に2つの監禁房があった。ある米捕虜が、第7分所の北にある中国人労働者の宿舎「東亜寮」から、パイナップル缶と味噌と油を2回にわたって盗んだという。2回目の時に彼は捕まり、監禁房の1つに8日間入れられた。

山本ヤスマサ少尉が所長だった時期に、4人の捕虜が脱走を図った。このうちの1人は東亜寮の物品を盗んだ捕虜だった。彼らは捕まり、監禁房に2、3日入れられた。そして1945年6月中旬、仙台から憲兵隊が来て、彼らを仙台に連行した。彼らは日本降伏後に、憲兵隊によって第7分所に連れ戻されたが、彼らが憲兵隊にどのように扱われたかについては不明である。

■医療・死者

医務室や病室は収容所の南西の建物の中にあっただ。日本人軍医のアラタ・トシジ少尉は秋田市の陸軍病院に勤務していたため、収容所にはそう頻繁に来られなかった。そこで、捕虜の医療は主にアメリカ

人軍医 Emil E. MERKEL 大尉ともう 1 人の中尉が担っていた。

収容中に 6 人の捕虜が死亡した。米捕虜 Arthur B. TAYLOR 兵卒は肺炎でアラタ中尉の治療を受けたが、1945 年 2 月 1 日に死亡した。彼の遺体は火葬され、遺骨は収容所の病室の一角に保管されていたが、1945 年 9 月に捕虜たちが去るときに持っていった。

米捕虜 Clarence A. GAVITT 兵卒もまた肺炎で、アラタ中尉と中山軍曹が花岡病院から薬を調達して彼を治療したが、1945 年 3 月 9 日に死亡した。彼の遺体は火葬されず、木の棺に収めて、花岡の南の上山に、米将校 2～3 人が見守る中、日本人職員によって埋葬された。GHQ の調査官が 1946 年 1 月に調査に行った時点では墓がまだ残っていたという。

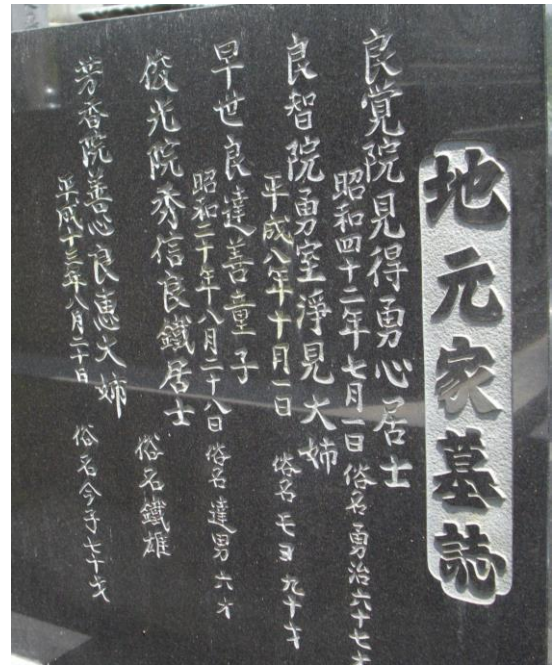
James EWING という米民間人捕虜は急性肺炎に罹り、米軍医たちが治療したが、1945 年 7 月 10 日に死亡した。彼の遺体は火葬され、遺骨は捕虜たちが帰国時に持っていった。

米捕虜 Robert O. JANSEN は急性肺炎、脚気、麻痺またはリウマチなどで 1 ヶ月以上病床にあり、日本人や捕虜の衛生兵が治療に当たったが、1945 年 7 月 15 日に死亡した。彼の遺体は火葬され、遺骨は捕虜たちが帰国時に持っていった。

終戦後まもなく、2 人の捕虜が盛岡の陸軍病院に送られたが、詳細は不明である。

また 1945 年 8 月 28 日、米軍機 P51 から 50 キロの木箱がパラシュート投下された時、2 人の捕虜が死亡した。パラシュートが開かず、木箱が収容所北側の第 3 兵舎の屋根を突き抜けて落下したためである。その 1 人、アメリカ人の William H. FISHER 兵卒は兵舎の屋根の上におり、もう 1 人のオーストラリア人将校 R.V. JOHNSON 中尉は、兵舎の中にいた。2 人は収容所のすぐ北の丘のカワネンド（観音堂？）に埋葬された。GHQ の調査官が 1946 年 1 月に調査に行った時点では墓がまだ残っていたが、雪があまりに深く、墓標の確認はできなかったという。

同じ日、別の地点に落下したドラム缶の下敷きになって、日本人の少年も死亡している。筆者が 2010 年 6 月に花岡を訪ねたとき、谷地田氏が案内してくれた信正寺の墓地にその墓があった。地元達男ちゃん、6 歳であった。



物資投下事故で死亡した少年の墓誌

■「花岡事件」と連合軍捕虜

このレポートが主に参考にした GHQ/SCAP 法務局調査課報告書 304 号は、1946 年 1 月に調査官が現地に赴き、主に花岡鉱業の副所長・日野マコト、労働監督の久保清一郎、花岡の巡査・千葉タンジロウなどから聴き取ったことを元としている。筆者の知る限り、連合軍捕虜に関してはこれ以外の資料は極めて少ない。捕虜自身の体験記も見つからず、郷土史にもわずかな記載しかない。滞在期間がわずか 7 ヶ月ということもあるだろうが、おそらく人々の関心が、大きな犠牲者を出した「花岡事件」に集中していたせいかもしれない。しかし、冒頭に書いたとおり、「花岡事件」が発覚したのは進駐軍が連合軍捕虜の調査に来たことがきっかけだったと言われ、同事件関係の文献にも所々に連合軍捕虜のことが記さ

れている。それらを拾い上げながら、花岡事件と連合軍捕虜との関わりを見ていきたい。

野添憲治著『花岡事件の人々～中国人強制連行の記録』によれば、戦中、労働者が不足していた花岡鉦山には、朝鮮人、中国人、連合軍捕虜などの外国人が多数投入された。朝鮮人は1942年頃から徴用されて花岡鉦山に来るようになり、1944年の最大時には4,500人にも達した。中国人は2グループあり、1グループは花岡鉦山（藤田組）に直接雇用された中国人徴用工約300人で、彼らは1944年頃に連れてこられ、連合軍捕虜収容所の少し北の「東亜寮」に収容されていた。もう1つのグループが「花岡事件」の人々で、1944年8月から3回に分けて連行されてきた中国人“捕虜”986人である。彼らの中には国民軍や人民解放義勇軍の兵士として捕らわれた人もいるが、実際にはいわゆる“劳工狩り”で集められた人が大半であった。彼らは花岡鉦山の下請け・鹿島組に雇用され、「中山寮」に収容された。連合軍捕虜は1945年1月末から3回に分けて290人が到着し、陸軍の管理のもと、花岡鉦山（藤田組）に雇用されていた。

同時期に花岡にいた朝鮮人、中国人、連合軍捕虜は、労働現場は違っても互いの生活ぶりを目にする機会があった。「中山寮」の中国人で、戦後日本に残った李振平氏は、連合軍捕虜たちの様子についてこう語っている——「アメリカ人の食べる物、トラックか馬車で、途中まで運んでくるでしょ。それから上は、道路悪いから、私たちの寮のすぐ上に下ろして、それからアメリカの人が上の寮に運んでいくの。おろして運ぶ時に、袋や俵、破れるのがあるでしょ。その破れた穴から、中に入っているもの、こぼれるの。アメリカの人、そのこぼれたの拾って、一生懸命ポケットに入れたり、口に入れるかしの。わたし見たの。あれは米でないけど、麦かなにかね。わたしたちよりずっといいもの食べているさ。わたし、その場所に一度行って、10粒ぐらい拾って食べたことあるけど、本物の麦かなにかね。味でわかるよ。（中略）現場に働きに行く途中、ときどき働きに出るアメリカ人と道路ですれ違うことがあるの。（中略）アメリカ人の場合も、わたしたち中国人より、からだやせていないでしょ。顔色もいいよ。私たち中国人たちだけね、ひよろひよろやせているの」。捕虜たちにも様々な苦難があったはずだが、それでも中国人から見ればまだましだったと思われる。

「中山寮」の中国人が蜂起したのは1945年6月30日であった。彼らは鹿島組が請け負っていた花岡川の掘削工事に従事していたが、過酷な労働と劣悪な環境、日常的な飢餓や虐待により、同年6月までに140人が亡くなった。これに耐えかねた約800人が、6月30日深夜、耿諄（こうじゅん）隊長の指揮のもと蜂起し、中山寮の日本人指導員など4人を殺害した後、獅子が森に立て籠もり、ある者たちは近隣の村や青森県境にまで逃げた。しかし翌7月1日、憲兵、警察、警防団が出動して鎮圧され、鉦山の芝居小屋「共楽館」に集められて113人が虐殺された。その後も死者が続出し、結局1945年11月の帰国時までに総計419人（蜂起以前の140人を含む）が死亡するに至った。死亡率は43%に及ぶ。これが「花岡事件」である。

当初の蜂起計画では、連合軍捕虜や「東亜寮」の中国人も巻き込む予定だったという。前出の李振平氏は、この蜂起の首謀者の1人でもあった。「最初の計画から、わたしたちだけでなく、東亜寮の朝鮮人（笹本註：実際は中国人。李氏の記憶違いと思われる）やアメリカ兵も解放して、一緒に立ち上がることを決めていたの。わたし、中国でゲリラの経験あるでしょ。からだ強くてゲリラの経験あるの70人ばかり連れて、東亜寮とかアメリカ兵のいる寮を襲って、武器とりあげて、解放した人たち一緒に連れていく計画だったの。（中略）蜂起しても、武器ないと、何にもできないでしょ。わたしたちだけで800人ぐらいでしょ。それに朝鮮人（註：東亜寮の中国人）が300人ぐらい、これにアメリカ兵たち入れると

1,300人ぐらいになると考えたの。これに武器あれば、たいへんな力になるという計画だったの。(中略)皆で山の中を逃げて、海に出るの。海の港か浜に、ボートか船があったら、それ盗んで乗り、中国に帰りたいと考えたの」。

蜂起計画は極秘裏に、綿密に周到に進められたが、しかし、思わぬことから破綻してしまう。それぞれが任務の部署につかなくうちに、待っているのにしびれを切らしたメンバーが、中山寮の軍需室にいた中国人、任鳳岐を殺害してしまったからだ。任は彼らの同胞だったが、仲間の食料を横流しし、大勢の仲間を餓死に追いやった裏切り者であった。任の悲鳴があまりに大きかったため、日本人補導員の逃亡を防ぐために配備されることになっていたメンバーが、まだ寮の中にいるうちに、補導員の宿直室になだれ込んで4人を殺害し、他の日本人は窓を破って逃げてしまった。そして、5分も経たないうちに事件を知らせるサイレンが深夜の鉱山町に鳴り渡った。このため、計画の中にあつた連合軍捕虜の解放も、花岡警部派出所の攻撃も、中山寮の放火も中止になり、約800人の中国人は四散し、やがて鎮圧されて多数の犠牲者を出すことになったのである。

もし、この計画が予定通りに実行されていたらどうなっただろう？ 捕虜たちも中国人と一緒に山の中を逃げ、船で海を渡り、中国に行っていたらどうか？ しかし、たとえ彼らが解放されたとしても、すぐに鎮圧され、さらに大きな悲劇になっていたのではないかと、筆者にはそう思えてならない。

耿諄隊長はじめ事件の首謀者13人は秋田刑務所に送られ、生き残った人々は中山寮に戻されたが、8月15日に終戦になっても、彼らには知らされず、過酷な暮らしが続いていた。終戦を知ったのは、8月末のことだった。李氏と同じく日本に残った劉智渠氏はこう語る——「日本が戦争に負けたのわかんないから、仕事なんにも変わっていないし、食事そのままね。(中略)わたしたち働いている頭の上に、飛行機低く飛んできて、荷物落下傘で落としたでしょ。その飛行機見ると、日本のマークついていないでしょ。星のマークついとるでしょ。戦争が終わったのではないかと、その時思った」。



花岡平和記念館展示「花岡蜂起・惨劇曼陀羅の図」 北海道発足村(現・共和町)の元鹿島玉川出張所で補導員をしていた志村都さんが、共楽館で拷問を受ける中国人の状況を、贖罪の気持ちを込めて描いたものだという。

事件が発覚したのは、前述したように、進駐軍が連合軍捕虜の調査に来たのがきっかけだったと言われる。証言者によって多少の食い違いがあるが、『尊厳～半世紀を歩いた「花岡事件」』の著者、旻子氏はこう書いている——「十月、アメリカの調査員が、中山寮の小屋に汚い木箱があるのを発見した。その中には死体が無造作に入れられており、死体の踵が箱からはみ出していた。小屋の中には腐臭が立ちこめており、アメリカ調査員は日本の管理人に即刻焼却することを命じた。アメリカの調査員はたくさん写真を撮ったが、その中には、鉢巻山から掘り出してまだ腐乱もしていない勞工の死体と大量の遺骨の写真があった」。

10月に花岡にやってきた進駐軍は第8軍152部隊である。おそらく町の占領と捕虜収容所調査の先遣隊として派遣され、その調査中に花岡事件のことをどこかで聞き込み、中山寮に行ってみたのではないかと推測される。彼らが撮影したという中国人の死体の写真は、花岡平和記念館に展示されている。捕虜収容所の本格的調査は1946年1月にGHQ/SCAP法務局調査課の調査官によって行われ、このレポートの資料となった報告書としてまとめられた。

連合軍捕虜たちは、9月12日頃に帰国の途に着いたが、中国人はその2ヶ月半後の11月29日、戦犯裁判の証人となる24人を残して故国に帰っていった。

■花岡の戦後

仙台第7分所からは、以下の3人が戦犯に処せられた。佐藤正（大尉）5年→4年、正木及勝（軍曹）20年→19年、白川松三郎（軍曹）10年→9年

一方、花岡事件の関係者は6人が裁かれ、うち3人が絞首刑の判決を受けたが、後に終身刑や重労働40年に減刑された。

その後、地元及び全国の有志によって中国人犠牲者の遺骨送還運動が始まり、1963年には十瀬野公園に「中国殉難烈士慰霊之碑」が建立され、翌1964年には中山寮を見下ろす丘の上に「日中不再戦友好碑」が建立された。また1989年頃より、花岡事件の生存者や遺族によって、鹿島建設（旧鹿島組）に謝罪と補償を求める運動が起こり、1995年には東京地裁に提訴された。そして、2000年11月、同社と原告団の間に「和解」が成立することになったのだが、その後、この「和解」の評価をめぐる関係者の間で激しい論争が繰り広げられ、決裂状態のまま今日に至っている。そうした中、2010年4月、「中山寮」の中国人が掘削工事に使役された花岡川の畔に「花岡平和記念館」がオープンした。花岡事件の追悼行事や中国人との交流活動を続けてきた地元NPO法人「花岡平和記念会」が全国から浄財を募って建設したものだという。この史実を次世代に伝えていくための拠点として、事件に関わる数々の貴重な資料を展示している。



花岡川の畔に建つ花岡平和記念館 2010年6月撮影

花岡鉱山は1994年に閉鎖された。悲劇の舞台となった「中山寮」は鉱泥ダムの底に沈み、もう1つの中国人グループがいた「東亜寮」も連合軍捕虜の収容所も、その痕跡は何一つ残っていない。谷地田氏

によると、後継会社の DOWA は精錬技術を生かしたりリサイクル工場で、大久野島の毒ガス残土など日本中の汚染土を処理しているという。2011年3月の福島原発事故の後には、千葉県流山市に飛散したセシウムを含む焼却灰も花岡と小坂に運び込まれ、一部は薬剤処理後、鉱山跡地に埋め立て処分されたが、残りは流山に送り返されたとのニュースもあった。



DOWA のリサイクル工場 2010年6月撮影

参考文献

- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書 304 号（国会図書館憲政資料室蔵）
- ・ 『花岡事件の人たち～中国人強制連行の記録』野添憲治著／社会思想社／1995 年
- ・ 『シリーズ 花岡事件の人たち～中国人強制連行の記録 1～3 集』野添憲治著／社会評論社／2007～2008 年
- ・ 『尊厳～半世紀を歩いた「花岡事件」』旻子著・山邊悠喜子訳・「私の戦後処理を問う」会編集／日本僑報社／2005 年
- ・ 「虜囚の記憶を贈る 第 5～6 回」野田正彰／『世界』2008 年 1～2 月号／岩波書店
- ・ 「反論 花岡和解の事実と経過を贈る」田中宏／『世界』2008 年 5 月号／岩波書店
- ・ 「田中宏氏に反論する」野田正彰／『世界』2008 年 6 月号／岩波書店
- ・ 「大事な他者を見失わないために」林伯輝／2008 年 7 月号／岩波書店
- ・ 「“花岡和解”を検証する」有光健・内海愛子・高木喜孝・岡本厚／『世界』2009 年 9 月号／岩波書店
- ・ 『京浜地区の捕虜収容所・中間報告書』笹本妙子著／アート出版／1999 年
- ・ 『連合軍捕虜の墓碑銘』笹本妙子著／草の根出版会／2004 年
- ・ 『捕虜収容所補給作戦 B-29 部隊最後の作戦』奥住喜重・工藤洋三・福林徹著／2004 年
- ・ 『日本軍の捕虜政策』内海愛子著／青木書店／2005 年
- ・ ウェブサイト「POW 研究会」<http://www.powresearch.jp/jp/index.html>
- ・ ウェブサイト「Center for Research Allied POWS Under the Japanese」<http://www.mansell.com/pow-index.html>
- ・ ウェブサイト「捕虜 日米の対話」<http://www.us-japandialogueonpows.org/index-J.htm>
- ・ 『大日本帝国内地俘虜収容所』茶園義男編著／不二出版／1985 年